中赤外超伝導ホットエレクトロンボロメータミキサの特性評価

Evaluation of Mid Infrared Superconducting Hot Electron Bolometer Mixers

情通機構¹, 茨城大院², 福井高専³ ⁰川上 彰¹, 島影 尚², 堀川隼世³, 田中秀吉¹, 鵜澤佳徳¹ NICT¹, Ibaraki Univ.², Fukui Col.³

^oA. Kawakami¹, H. Shimakage², J. Horikawa³, S. Tanaka¹ and Y. Uzawa¹

E-mail: kawakami@nict.go.jp

中赤外領域における地球環境計測,情報通信, セキュリティ応用などを目指して,ナノアンテナ を用いた中赤外超伝導ホットエレクトロンボロ メータミキサ(MIR-HEBM)を検討している.既に 同領域・極低温下(10 K)における金薄膜の複素表 面インピーダンスを評価し,従前の電磁界シミュ レータに導入することで,中赤外光領域でのアン テナ・分布定数回路の設計が可能であることを示 した[1]. 今回, MIR-HEBM を試作, IF 帯域幅 評価, 雑音温度などミキサ特性評価を試みた.

試作した MIR-HEBM は、中赤外光アンテナと その給電点に配置した超伝導検出部から構成さ れている.アンテナには金薄膜(膜厚 50 nm)で構 成したツインスロットアンテナを採用、スロット 長 2.2 μ m,幅 0.2 μ m とした.61 THzにおけるア ンテナインピーダンスは Z_{Ant} = 250 – j6 Ω と見積 もっている.アンテナで受信した信号はコプレー ナ線路を介して中央の超伝導検出部に伝達、検出 部には窒化ニオブ(膜厚 5 nm)とニオブ(膜厚約 1.5 nm)のエピタキシャルニ層膜による超伝導スト リップ(T_C~ 10.3 K,長さ幅共に 0.2 μ m)を用いた. 基板には酸化マグネシウム単結晶基板を用いた.

図1に MIR-HEBM 評価測定系を示す. 局部発 振源(LO)としては波長4.89 µmの中赤外量子カス ケードレーザを用いている. ここで MIR 領域で は MgO の誘電率は2.66 に低下することから, 裏 面(空間)側も基板側前面利得の23%程度のアン テナ利得が予想される. そこでビームスプリッタ による信号入射損失の低減も兼ねて, バンドパス フィルタ(BPF), CaF2真空窓, サファイア熱遮蔽 を介して裏面側から HEBM にLO 照射している. 信号源としては室温黒体及び 1100 K 黒体炉を 用いた.信号は BPF, CaF2 真空窓, サファイア 熱遮蔽を介して冷凍機内に導入(全透過率約 50%), CaF2 レンズ, MgO 超半球レンズで集光し て HEBM に照射している. IF 信号は 1-18 GHz の冷却低ノイズ増幅器, 8 kHz-3 GHz の室温増幅 器によって増幅し, 中心周波数 1 GHz の BPF を 介してダイオード検出器で検出した.

HEBM に適切な LO を照射し, 抑圧された臨界 電流(Ic')付近に定電流バイアス(I_{BIAS}<Ic')を印加 すると, LO 照射電力の揺らぎ等により HEBM か ら偶発的に発生する電圧パルスが観測できる. そ のパルスを 4096 個平均化し,オシロスコープで 波形観測したところ,パルス半値全幅として約 0.21ns が得られた. HEBM の周波数応答特性をロ ーパスフィルタモデルで仮定することで IF 帯域 幅を導出したところ,約 0.8 GHz が得られた.

冷凍機振動による HEBM-LO 結合効率変化の 影響を抑える目的で,ボイスコイルを用いた LO 照射電力の安定化を実施した.その結果,わずか であるが信号源温度の差による IF 出力の変化を 観測,その IF 出力差から,61 THz におけるミキ サ雑音温度を約 17,000 K(DSB)[2]と見積もった. [1] A. Kawakami, et al., IEEE Trans. Appl. Supercond., vol. 27, pp. 2300105 (2017), [2] A. R. Kerr, IEEE Trans. Microw. Theory Techn., 47, pp. 325–329, (1999).

